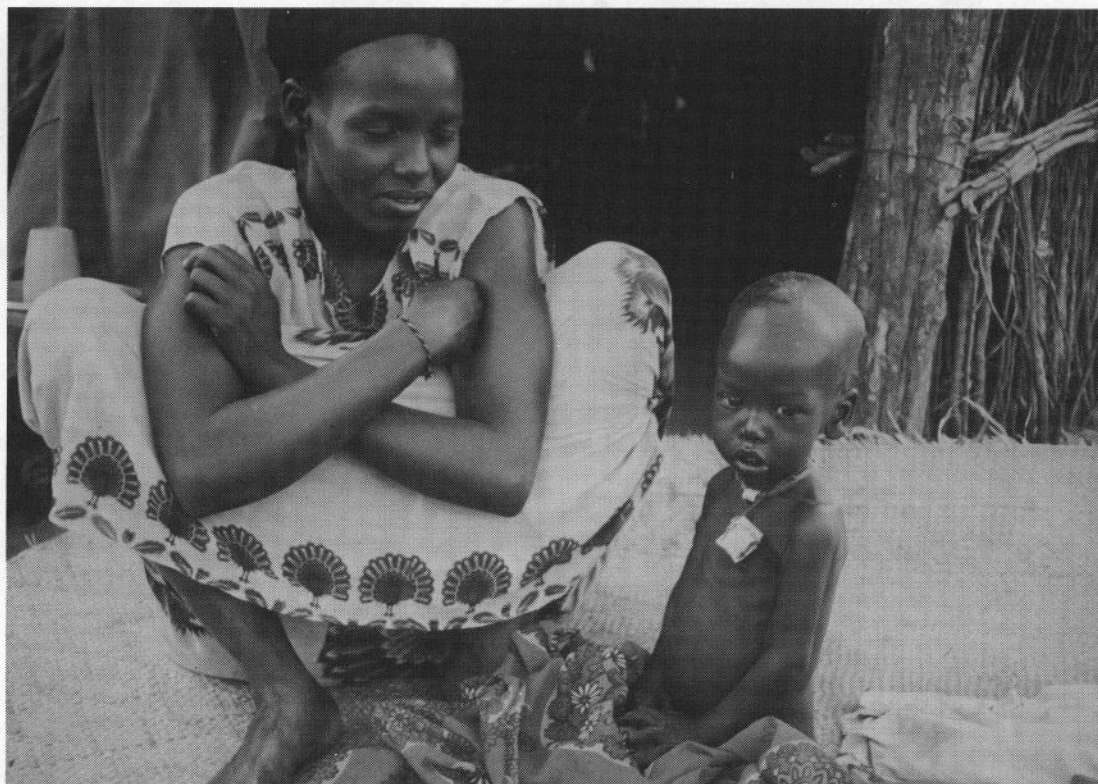


Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.48



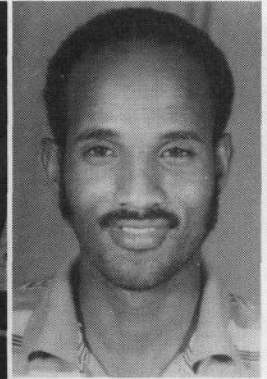
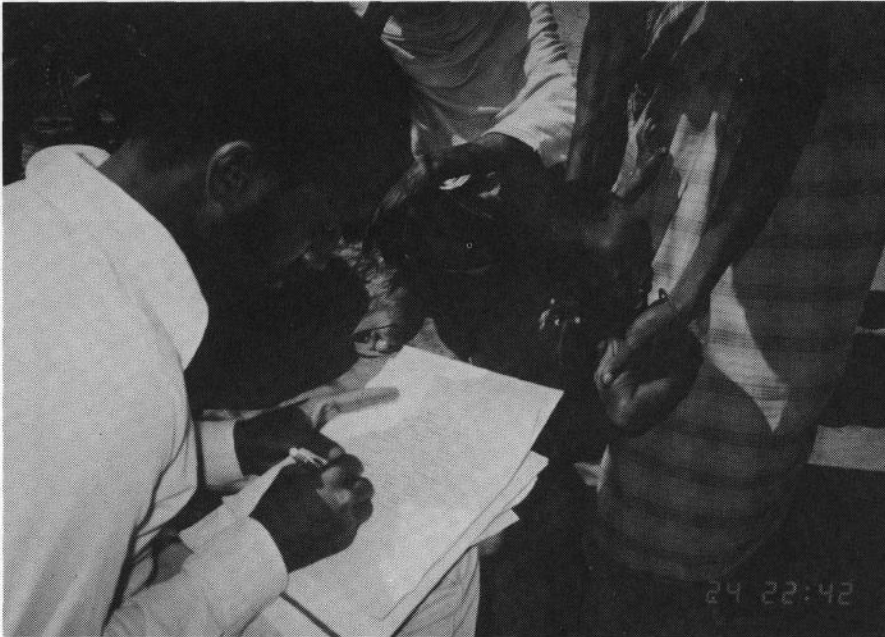
JVC 宿舎近くの病棟にて(ソマリア)

共に解決方法を	2
ソマリアという国	4
オガデンから来たアリ・コテじいさん	6
ソマリアの高橋さんへの手紙	8
シリーズ「平和・人権・開発」第1回	10
体系的な援助が必要	12

「共に解決方法を」

モハメッド・アデン・モハメッド

(JVCソマリア、プロジェクト・マネージャー)



新難民キャンプで調査中のモハメッド(写真左)

親愛なる編集長殿、

私に、6つの質問の全てあるいは一部に答えるようにとの1985年1月18日付の手紙を受け取り、とても嬉しく存じます。しかし、その手紙が、2月3日に遅れて届いたという事をお知らせするのは、本当に残念なことです。もっとも、お互いに責任があるわけではないのですが。多分、郵便を取り扱った郵便局に文句をつけるべきでしょうね。さて、私は粗末な英語を駆使して、全ての点に答えるべく書いてみようと思いますが、詳細を要約して簡単にします。

質問1. 難民としてルークにやって来るまでは、どのような生活をしていたのですか？

私はソマリア人で、カラフォの生まれ。現在28歳です。カラフォは、シェベリ川の川岸にあります。農業を営む家に生まれたので、故郷の町で、初等教育を受ける機会に恵まれました。(農家に生まれたのは幸運でした。もし、遊牧民の家庭に生まれていたら、学校に行けなかったでしょう。)中等教育は、故郷の町よりずっと北にある、ジジガという名

の、エチオピア高原のふもとにある大きな町で終了しました。中等教育を終えるとすぐに、オガデン地方の行政の中心であるハラルにある教師養成機関に、選抜されて入りました。ハラルでの2年間の養成で、初等教育の教師資格を取りました。その後、私は生まれ故郷の州の主要都市であるゴデに、初等教育研究のための地区調整員として赴任しました。しかしながら、それから2年後の1977年に、西ソマリ解放戦線(WSLF)とアビシニア植民地軍(つまりエチオピア軍)の、オガデンの領有をめぐる戦争が勃発してしまい、引き続き戦闘によりわれわれ住民全てが住む所を失い、難民となりました。われわれに残された選択は、隣国のソマリアに逃げて避難所を提供してもらうことでした。家族と一緒に着のみ着のままソマリアに到着したその瞬間から、私の新しい生活がスタートしたわけです。私は幸運にもアフゴイというところの教育専門学校で、自分の専攻を2年間にわたり、大学レベルに達するまで継続することができ、文学士の学位を授けられました。

私は、卒業後すぐに、ソマリアで働けるという幸運に恵まれました。私は、1981年には他の民間救

援団体に働いていたのです。とはいっても、JVCに採用される前の1年間は職無しの状態だったわけですが、現在は、JVCスタッフのアシスタントとして働いていますし、プロジェクト・マネージャーにもなりました。私事になりますが、昨年結婚いたしましたので、家庭を持ちました。ですから、責任と喜びを共に感ずる新生活を送っております。私は、懸命に働いておりますし、自分の仕事や、同僚、同胞である難民との完全な協同作業に生きる意義を感じている次第です。

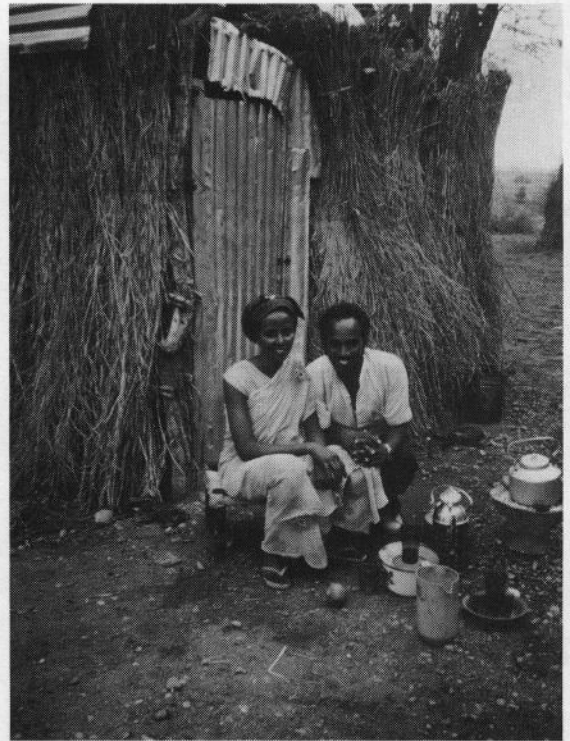
1979年に私がルークに来た時は、ここはとても小さな町で、住民もほんの少しでした。現在、この町の人口はその当時の5倍程で、これは近くのキャンプの難民と商売するために、ソマリアの他の町から人々がやって来るからです。このため、ルークは、現在まるで都会のようです。(しかし、そこで問題が起ってきています。キャンプ周辺の木を、難民が切ってしまうのです。)

質問2. 遠い国からやって来た日本人は、あなたの目には、どう映るのでしょうか？

JVCのスタッフと一緒に働いてみての印象は明瞭です。JVCは、非常に遠方から来て、われわれの民族が食糧生産をするための援助をしたり、難民のなかに「自信と自立の精神」を活性化させようとしています。また、(難民であるが故に、政治的に発言権を持たぬわれわれの代弁者として、) NRC*1、UNHCR*2と交渉し、プロジェクトの方針を調整しています。JVCは、私に非常に大きな責任を伴う仕事を遂行する能力を与えてくれました。この点においては、私は本当に感謝しています。

質問3. あなた方が、独自の力で全てを運営できるようになった時、あるいは不測の事態が発生した時、いずれにせよJVCは、去らねばならない運命にあります。その後は、どうするのですか？

JVCは、いつの日かソマリアでの活動を中止し引き揚げるであろうと、私は確信しています。ご存じの通り、JVCの機能は、難民援助のみならず、JVCと共に働く現地人スタッフの養成にあります。JVCが、いつソマリアでの活動を中止してもいいように、私の望むのは、日本人スタッフと共に働くなかで得た経験をもとに、われわれ自身でプロジェクトを推し進めていけるようになることです。



新婚ホヤホヤ？

質問4. 将来、なにを期待していますか？

私の最大の望みは、私の持つ農業と穀物生産の知識をできれば外国(abroad)で広めることです。最も期待し目標としているのは、自国に戻り食糧自給率のグレード・アップを図ることです。

質問5. あなたにとって、「平和」とは？

私にとり「平和」とは、人間としてごく当たり前の生活をするのに、障害となる戦争やその他のことから自由になることです。

質問6. 日本に住む人々にメッセージを。

何よりもまず最初に、日本の皆さんが、難民と干ばつの被災民に対し支援して下さいことに感謝いたします。私が伝えたいことは、世界のどこかに居るわれわれと同様の状況にある人々のために、皆さんが人道主義的な援助を継続して下さいことと、またこうした「人間」の苦悩を取り除くための解決方法を共に考えて欲しいということです。

* 1. NRC：ソマリア政府、国家難民委員会。

* 2. UNHCR：国連難民高等弁務官事務所。

「ソマリアという国」

柴田久史(本部事業部担当)



同じナベで昼食をとる柴田(左)とモハメッド

☑モハメッド・アデン・モハメッド

私と彼は、何度口論したことか。日本人など見たことのなかった彼と、そしてソマリア人と出会うとは夢にも思わなかった私が、一緒に難民救援という仕事を始めたのは、1983年8月のことだった。

私が、ソマリア人^{*1}の文化、生活、習慣を学ぶのは、彼をはじめとするJVCソマリア人スタッフからが多かった。

モハメッドは敬けんなイスラム教徒で、毎日5回のお祈りを欠かさない。私はといえば、タバコをくわえながら、彼のそばでこの光景を見ていた。初めは何となく奇異に見えた「お祈り」の姿も、時がたつにつれてうらやましく思う様になった。毎日あたたかく働く日本人と比べ、一日5回、身を清め、「お祈り」という自分の静かで神聖な時間を持ち、神に感謝する一私達が既に忘れてしまった何かを彼はその生活の中に息づかせていると感じたからだ。

6月のラマダーン(イスラムの断食の月、日の出から日没まで、水も食事を取ってはいけない。)には、彼は本当に苦しそうな顔で仕事をしていた。日中には、ときどき“つまみ食い”をしていたソマリア人スタッフもいたが、モハメッドだけは日中40度を超す猛暑の中でも水を飲まなかった。おかげで、彼の顔はむくんだままだった。飽食し、水道をひねればきれいな水をふんだんに飲める日本の生活を思うほどに、こうして毎年毎年、断食を経験し、「食」と「水」のありがたさを確認している砂漠の民の強さと知恵を感じた。

仕事時間中に、モハメッドが車で町まで行った時のこと。たくさんの人々を同乗させ家まで送っていくため、なかなか帰って来なかった彼と私は口論した。「お互い助け合いの精神が生きているソマリアで、みんな無視して私だけ車に乗っていたら、今度私が車に乗せて欲しい時には、誰も助けてくれない。やがて、遠い日本へ帰ってしまうシバタはいいが、私はここで一生暮らさなければならぬんだ…」とは、モハメッドの弁。資金をUNHCRからもらい、毎月毎月、進行状況を評価されてしまう私達の仕事。仕事の効率のみを優先させてしまう私の考え方。彼の言葉は、「人間関係を最も重要視し、ゆったりと歩いてゆくソマリアの社会」を無視して、ついせうかちになり焦ってしまう私への強烈な忠告だった。

☑徴兵と結婚

町を歩いている若者を突如として連れ去り、そして兵隊に仕立ててゆく。——突然現われる軍のトラックを見て、彼はいつもおびえていた。外国人であるが故に絶対連れ去られる事のない私は、トラックの荷台に乗せられた彼らの幸運を祈る以外になす術がなかった。トレーニング・センターに送られ、いずれば前線へと送られていく彼ら。恋人が、妻子が、家族がいたかもしれない。平和な国「日本」に生まれ、実際の戦争というものを知らない私ではあるが、戦時中、赤紙1枚で徴兵され、戦地へと送られていった日本人たちの話をふと思い出した。ソマリアの徴兵制について、モハメッドに聞いたが、黙ったままだった。おそらく「いったん、戦争に突入してしまってから、平和を叫んで無駄だよ。話すことなんかないよ」と彼は言いたがったのではないだろうかと察した。

私が、時々わけもなくイライラして、ソマリア人スタッフを怒ってしまうと、彼は「シバタは遠い全く環境の違う日本から来て、苦しんでいるんだ」と、後でそのソマリア人スタッフに納得のいくように言い聞かせていたという。泥と木の枝でできたソマリア式の家で、夜中、石油ランプのもと、ゴザに座り、2人でお互いの社会の違い、イスラム教、女性観、結婚、夢、そして難民の将来を語り合った。

そんな彼が、昨年9月に結婚した。10年以上、お互いに想い合っていたが、彼が仕事も収入もなく結婚できないでいた。しかし、JVCで働き始め、今ではソマリア人スタッフの長にもなったので、ついにゴール・インという次第である。「彼女は、きれいなのでよく結婚を申し込まれていたが、私（モハメッド）がいるのでみんな断わっていたんだよ」と私にのろけた。

☒ソマリアの将来

難民と私達日本人の間にトラブルが起こると、キャンプと我々の宿舎を往復して互いに説得にあたったのも、モハメッドだった。

朝7時、日本人とソマリア人スタッフの間で、その日の仕事の段取りをする。初期の頃は、私達日本人が全て指示をして決めていたが、一年もたつ頃には、モハメッドは「今日は、こうしよう」と彼の方から提示するようになった。私達の用意した段取りよりも、彼の考えの方が理にかなっていて、「よし、それでいこう。」と私達が言うことの方が多くなった。

もし、モハメッドのようなスタッフがたくさんいれば、我々のような外国人なんか全く必要ないのだが、何しろソマリアの国自体、資金がない、働く場所がないため、若い有能な人材が生かされないのだ。モハメッドには、将来のソマリアを支えていく人間になって欲しいと思うのだが、彼自身、外国で働きたいという希望を持っている。現在、20万を超えるソマリア人が、サウジアラビア、クウェート、イタリア、ドイツ、アメリカなど外国で働いているという。国内には職がないし、徴兵の不安もある。逆に外国には高収入の仕事と生活の豊かさがあるといった事情により、本来なら国を支えるべき人達が、国外へ流出してしまった。モハメッドは、JVCが永遠にここで活動するわけではないことをよく知っている。



これでも雑貨屋さんです。(ルーク)

る。もし、我々がソマリアを去ってしまえば、以前のように職もなく、収入もなく、路頭に迷ってしまうであろうことを不安に思っている。そして徴兵の不安も……。

☒ソマリアに未来はあるか？

時々、欧米のボランティア仲間と話すと、「ソマリア人スタッフが働かない上、信用できない」というグチをよく耳にした。しかし、私はそう思わない。仕事に生きがいを感じ、生活が安定するようになれば、彼らは私達以上によく働き、自分達のことを真剣に考えるのである。まさにその事を我々に証明してくれたのが、モハメッドである。

ソマリアにいる70万人の難民問題を本質的に解決するには、難民への直接援助の他に、①ソマリアに地場産業を起こして、ソマリアのエリート層が働ける場所をつくり、海外で働いているソマリア人が自分の国へ帰ってきて仕事ができるようにする。②オガデンをめぐるエチオピアとの闘争を国連の調停で止めさせ、ソマリア青年の徴兵への恐怖を取り去る。③国内にいるモハメッドのような人材をソマリア政府自ら発掘してゆき、難民関係の仕事を与え、給与を国連から支給してもらう。④国連やボランティア団体は、ソマリアの難民問題を個別のものとして捉え、現在ソマリアの開発問題、難民問題などと別々に活動している国連機関、(UNHCR, UNDP, UNICEF, FAO, WFP)などは、統一機関として動いていく、といった事が肝要であろう。以上の4点は、遠大な計画ではあるが、現実はどうかと言えば、ソマリアの難民問題が起こって以来5年以上たつのに、何ら解決の道を見出していない。国連機関とボランティア3団体は、もう一度、ソマリアにおける問題の本質を見つめ直さなければならない時が来ている。

私がモハメッドと話すと、いつも感じたのは、「こんな難民問題は、私もしシバタや国連職員のように力があれば簡単に解決できるのに……」と、彼が叫びたいのをグッと抑えていたことだ。

私は、これからソマリア担当として日本で現場を支え、国内へアピールしていくわけだが、モハメッドとの会話を思い出し、もう一度、「難民援助」と共に我々日本人の生活を原点から考え直してみようと思っている。(3月20日、荏原病院にて)

*1 エチオピアからやってきた難民もソマリ族であるため、単に「ソマリア人」と言った場合、難民とソマリア国民の両方を指す。

「オガデンから来たアリ・コテじいさん」

聞き手：掛村 均（JVCソマリア） 通訳：モハメッド・ハジ・ヌール（^ク）

アリ・コテじいさんは、オガデン地方のワラポーマダラという村で生まれ育った。豊かな土地で、妻と子供に囲まれ、半農半牧の幸福な生活を送っていた。やがて村人の人望を集め、クラン（小部族）の長となった彼は、静かに孫達の成長を見守ろうとしていた。おそらく、エチオピア政府の急進的な革命政策がこの静かな村に波及しなければ、オガデン紛争が勃発しなければ、彼はそうしたに違いない。クランの仲間を、妻を、子供達を、家畜を奪われて、彼は難民となった。1979年のことである。

現在、アリ・コテ・コルメさん（60歳）は、ソマリアのルーク地区マガネイ・キャンプと一緒に逃れて来た家族と共に住み、JVC ハルガン農場の一農民として自立を目指している。農場の用水路沿いにルシナ*1の木が立ち並んでいる。アリ・コテじいさんは、その木蔭でポツリポツリと私に話をしてくれた。以下は、彼へのインタビューの抜粋である。

Q. ソマリアに来た時は、大変だったでしょう。

大変だった……。わしには、2人の妻と22人の子供がいたんじや。7人が娘、残り15人が息子で皆いい子だった。その内、1人の妻と子供14人はエチオピア軍に連れていかれた。今どうしてるかって？ 判らんな……。ソマリア、ケニア、エチオピアを流れる商人にいつも聞いてみるんだが、消息はない。家族を連れ去られ、家畜を奪われ、クランが崩壊しそうになって、わしはアボ族（オロモ系）250家族、約1,000人を連れて逃げて来た。牛150頭、ラクダ30頭、他にもたくさんいた家畜が、2カ月歩いてソマリア、エチオピア国境にたどり着いた時は、ロバが1頭残っていただけじゃったよ。国境からソマリア軍のトラックに乗せられて今のキャンプに住み始めた。もう5年も前の話だが、昨日の事の様に覚えている。

Q. じいさんはクランの長だったらしいけど、エチオピアではどんな生活をしていたんだい？

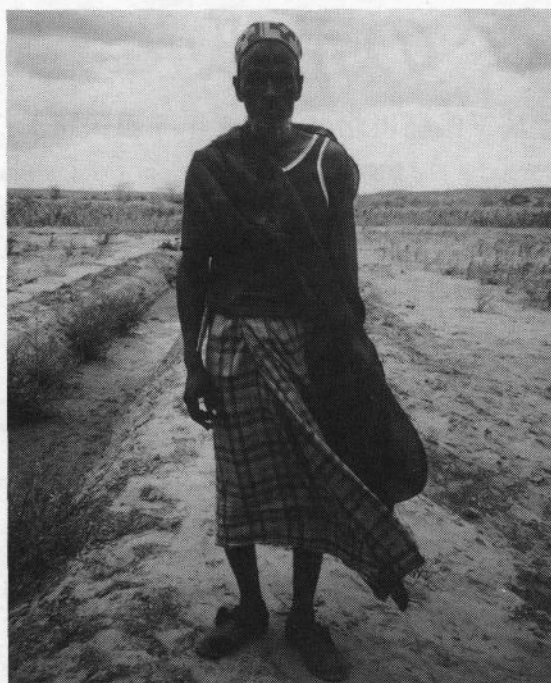
村は、山地にあっての。ここと違い涼しい所だ。雨も多く降り、ゲナレ川の水は人間と家畜を潤してくれたよ。ゲナレ川か？ ジュバ川の事じゃよ。エチオピアではそう呼んでおる。家は1カ所に集中して建て、周りに農場をつくる。わしは家と農場を3つずつ持っておったよ。2人の妻に1つずつ家を

与え、交互に通った。公平にしないとうるさいからの。おまえは、まだ妻がおらんのじゃと？ 何をボヤボヤしとるんだ。わしは15歳の時に、牛2頭、ラクダ2頭で嫁をもらった。2人目の妻の場合は、現金で支払ったがね。妻を買った？ 冗談言っちゃいかん！ もちろん、お互いにほれ合っったよ。ハッハッハッ（笑い）第一の妻は、主に家畜の世話をしていた。第二の妻は農場を見ていた。おまえさん達は、遊牧民、遊牧民とうるさく言っるとるが、わしらはちゃんと農業も知っるとる。オガデンは、ここ（ルーク）より農業に適した気候と土壌があり、わしはもう40年間、メイズ、ソルガム、砂糖キビ、コーヒー、テフ等を栽培し続けとるよ。テフは主食として作っていたが、雨の降らないこの地域ではうまくできんの、やはり。農業、牧畜以外に養蜂もやったし、川から魚を獲って随分と食った。おまえらの考えとる遊牧民とはちと違うのじゃ。

Q. 去年の初めての収穫の時は、じいさんの息子にとれたてのメイズを焼いて、随分と食わせてもらったよ。最近、農場の方はどうだい？

わしは、知っての通りアボの言葉しか話さんし、ソマリ族の者達とうまく会話ができない。しかし最近では農民間の仲も良く、通訳を通してだが随分と農場運営について相談する様になった。食うや食わずで、難民キャンプに流れて来た頃は誰もが貧しくてのう。食糧配給を受け、灌木を売って細々と生きていくしか仕様の無い状態じゃった。JVCが農場を切り開いたおかげで、ある程度収入も入ったし、本当に感謝しとるよ。この前の収穫で得た収入で妻を、モガディシュの病院に入れてやる事ができた。あれは長い間、腕にはれものができていて苦しんだったんじや。このあいだ、やっと手術を受ける事ができた。モガディシュまで会いに行ったいが、車を何とか手配してくれんか？ 心配なんじや。

そうそう、農場の事じゃったな。確かに中には、農業を知らない者もおる。隣の農場を見てみる。メイズの収穫が良かったものだから、メイズばかりを次々と植えている。あれじゃ土壤の肥沃度を下げただけじゃ。メイズのあとには豆科のもの、あるいは



「オガデンに帰れたらもう……………」

ゴマ等を植えて土を守ってやらなきゃいかん。灌漑の方法にしても、低い所から高い所へ水を流そうとしている者がおるが、あれは非効率だ。ディーゼル・ポンプの燃料のことを考えると、水は有効に使わんと。そういった事を教えてやらんといかんのだが、一度に全部教えることは難しい。少しずつ、少しずつじゃ。今も、時折わしの農場に難民を呼んで教えとるんじゃよ。

柴田は日本に帰ったか？ そうか……。奴は陽気な男で、いつも農場でわしに笑顔を見せてくれた。時々、何で笑っているのか判らなかつたがな。随分疲れている様子だったから、日本で充分休んでくれと伝えてくれ。高橋？ あれはよく怒るし、怖がっている者もいるが、本当にわしらの事を親身になって考えてくれるいい男だ。

JCVに頼みたいのは、ディーゼルの確保だ。この農場で、12月、1月の様に燃料が無ければどうにもならん。それと、肥料。化学肥料を野放図にまくのは、かえって作物を害すが、適時に適量を使うことでわしらの作物を害虫から守ってやりたい。この2つを頼む。

Q. じゃあ、最後に難民キャンプの様子を教えてください。

10

日おきに配給される食糧は、わしの家族では2日分しか無い。国連に登録された時点の家

族構成員分しかもらえないが、その後もどんどん来とるんじゃ。最近、特に難民が増えたのう……。山へ行って、灌木を拾っては売ったりしとるんじゃが、それも最近取り締まりが厳しくてのう。まあ来た当初に比べると、随分生活も楽になったが、まだオガデンにいた頃に比べると……。ここにずっと住むかって？ ……、難しい質問だ。オガデンに平和が戻れば、今すぐにでも帰りたいが、いつになるかのう。

ハイレ・セラシェ皇帝の時代はよかつた。収穫物も、ケニア東北部の市場で自由に売れたものじゃ。税金は、金持ちだけ、しかも土地だけにかかつた。年に、そうじゃなあ、2,500シリングも払えば良かつたのが、革命以降、金持ちにも貧乏人にも、全ての人に、しかも土地だけでなく家畜にも課税されたし、妻や子供も微税の対象となつた。そしてその後、オガデン紛争、エチオピア軍による収奪が始まつたわけだ。わしらクランの長は、前政権の役人と協力して村を守っていたからの。今の政権の迫害の対象になつたのじゃ。まあ大きな声では言えんが、メンギスツ（現エチオピア臨時軍事評議会議長）が生きてる限り、オガデンには帰れんじやろう。

しかし、オガデンはいい所だぞ。雨はよく降るし、土壌はいいし、涼しいし、作物は良く実るし。わしだって、できることなら帰りたい。わしだけでなく、皆、帰りたがとるじやろう。ソマリア人だって、日本人のおまえだって、一度オガデンに住めば、もう他の場所に行きたくなくなるはずじゃ。それ程いい所じゃぞ。わしらの故郷は…………。

アリ・コテじいさんは、めっぽう色が黒い。そして髪の毛は、真っ白だ。話をする時は、両腕で足を抱えて、小さな身体をさらに小さくさせて座り、くぼんだ目で相手をじっと見る。半年前までは、われわれともほとんど口をきかなかつた。話し合いがもつれると、急にエチオピアの諺を口走り、われわれを面喰わせた。そんなアリ・コテじいさんが、心を開き、笑顔を見せてくれる様になつたのは、去年の10月、丁度JVC農場で初めて収穫を見た頃だつた。

今回、ルシナの木蔭で、私に色々と言ってくれたアリ・コテじいさんの顔は、時には曇り、時には晴れた。平和だつた村を追われ、難民となつたアリ・コテじいさん。生きてゆくために、彼がやらねばならない事は、まだまだ多い。

* 1：ルシナ……別名マジック・トゥリー。

かなり生育が早いのでこの名がある。
JVCの農場では、防風林として植えてある。

ソマリアの高橋さんへの手紙

以下に紹介するのは、埼玉県樋川市立樋川北小学校5年3組（3月31日までの旧学年）の児童たちから、JVCソマリアの高橋一馬氏にあてた手紙の一部である。

このクラスの担任、小峰義明教諭は総合学習（一教科の枠にとどまらず、様々な学習を一貫してすること）のテーマとして、「アフリカの勉強」を行なった。

この授業は以下の8時間からなりたっている。

第1時「アフリカの人々の生活」ジンバブエを例に豊かな部分を含めアフリカの現況について。

第2時「アフリカの飢え」飢えの現況について。

第3時「飢えの原因と人々の自立への努力」旱魃などだけでなく、大農園など歴史的な事実も。

第4時「同じ人間として」各種の資料から、小峰教諭が作成した、高橋氏に関する文章を読む。

第5時「今、私たちにできることは」児童が考え、話しあい、計画を立てる。

第6時「高橋さんに励ましの手紙を出そう」これが以下で紹介する手紙である。

第7、8時「アフリカ特集」の壁新聞を作って他のクラスの人にアフリカのことを知らせよう」完成したものは廊下に掲示して、他クラスの児童に説明した（写真参照）。

◆私たちが勉強したこと

高橋さん こんにちは

私は、学校でアフリカの勉強をしました。ビデオを見たり、スライドを見たりしました。高橋さんの



埼玉県樋川北小学校 5年3組一同より

ことは、日本国際ボランティアセンターの事務所で話したことが書いてある、わらばん紙（小峰教諭作成の文章のこと…編集部注）を見て知りました。

私達は、アフリカの勉強をして話し合いました。

私達が、この勉強してやろうとしていることは、

○好ききらいをなくす

○物を大切にす

○アフリカのことを勉強して、クラス以外の人に知らせる

○募金活動

と、決めました

アフリカのことを勉強したからやろうとしたのだと思います。私はアフリカのことを勉強しなかったら、好ききらいとか、そのままだったと思います。

これからも、ガンバッテください。

体にも気をつけてください。

では、さようなら

1985. 2. 13

小幡由美子

◆「ふつうの人間で、ぜんぜん変わらないのに」

こんにちは、私は5年3組の福島和子です。

高橋さんは、どうして高校時代は、暴走族と変わらないような人だったのに、どうして（新聞）記事を見て、「くやしい」と思って、アフリカへ行ったんですか？ 私だったら、助けてあげたいと思う気持ちはあるのですが、アフリカへ行く事は出来ません。だって学校もあるし、親が反対するかもしれないし、なのに、どうして、ですか？ とても出来る事じゃないと思うのに…。

畑、水路、植物を作ってあげて、アフリカの人達も喜んでくれると思います。高橋さんは、親をくどいて農業関係の大学へ入って勉強して、よくやるなあ～。同じ人間でも、そこまでやる事ないと思うんですけど。でも、高橋さんは、ふつうの人間で、ぜんぜん変わらないのに、そうゆう心を持つ人なんて、日本に、世界に、あまりいないと思います。親にどうゆうふうにしてくだいたんだらう。よく出来たと思う。私だったら、親に負けちゃうと思います。

私達の組では、今アフリカの事を勉強して分からなかった事とかが分かりました。高橋さんよりは、よく分からないけど、だいたい、勉強して分かり

ました。でも、むかしのヨーロッパ人は、ちょっとざんぐだと思ひます。それにしても、アフリカの人々は、よくゆうことを聞いたと思ひます。そんなふうだったら、聞かなければいいのに、どうして聞いたんだらう。

高橋さん、これから、アフリカの人々の力になってがんばって下さい。お元気で…。

昭和60年2月13日(水) 福島和子(ヨリ)

これから紹介するのは、手紙から少しずつ、抜したもの。全部を紹介できなくて御免なさい。

◆「高橋さんは総理大臣より偉い」

「高橋さんは、暴走族と変わらないような少年だったとかいてありましたが、“インドでが死者”という記事を読んだだけで、たちなおるなんて、すごいですね。それにふつうだったら、かわいそうと思うけど、くやしいと思うなんて、めずらしいですね」(高橋圭司くん)

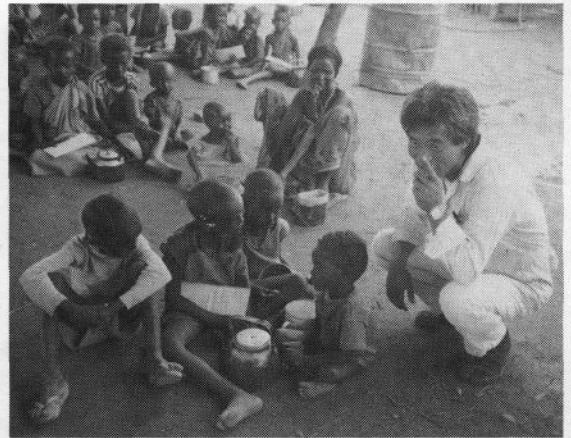
「アフリカには、ごうかな家でへやもあまっている家もあれば、まずしくてそのあまっているへやをもらいたいほどの家もありました。あと学校もありました。ぼくはこういうのを知って、(最初は)うそと思ひました」(伊藤広善くん)

「アフリカを勉強する前、後の気持が変わりました。高橋さんのくろうがよくわかりました。水はいつもさりげなく使っているけれど、とてもアフリカじゃないへんだということがわかりました。(中略)ぼくはそんな高橋さんを、総理大臣よりえらいと思ひます」(井上将企くん)

◆「写真で見たら、想像と違ってます」

「トラックや機械もないのに水路作り大変ですね。写真を見たら想像とすぐかけはなれていたの、びっくりしました。なんだか、もっとえらそうな顔の人かと思ひていたのに、写真を見たらそんな感じがな人でした」(定岡由貴江さん)

「みんな高橋さんの写真を見たら、みんなビックリしました。私は高橋さんは、アナウンサーみたいなめがねをかけた、もっとしんけんな人だと思ひました。でも、その写真のわらい顔はとっても、やさし



そうなかんじで、写真じゃなくてほんものの高橋さんにあいたいです」(柳井るみかさん)

◆「募金でも手伝いができたでしょうか」

「ぼくは、ボーイスカウトで募金活動をしたことがあります。まだそのとき、どんなにアフリカの人が苦勞しているか、わかっていませんでした。でもクラスでアフリカの事について、話し合っってどんなに苦勞しているかわかりました」(望月隆弘くん)

「むかし、ぼくは飢えとかを知らなかった。そして本かくてきに飢えとかを知ったのが、今(5年生)です。ぼくは、今その飢えでなにか手伝いができるでしょうか。ぼくにできるのは、ただぼ金です。ぼ金でもてつだいができたでしょうか」(飯村真吾くん)

「自分はどうして、ぼ金を人に言われてやっていたのだらう、高橋さんみたく、言われてではなく、どうして自分から進んで出来なかったのかと、しみじみ思ひました」(奥野順一くん)

(T/E編集部から)

小峰教諭からJVCに送られてきたものは、学習指導案、実践記録、手紙集、壁新聞の写真でした。周到に準備された教育が、子どもをいかに変えるか、感激して読みました。普通の人間が飢え、普通の人間が助けに行っていることを一人でも多くの人に知ってほしいと思ひます。手紙のコピーはソマリアの高橋氏に送りました。



「平和について」

JVC 執行委員
UNHCR 特別顧問
日本平和学会会長 栗野 鳳

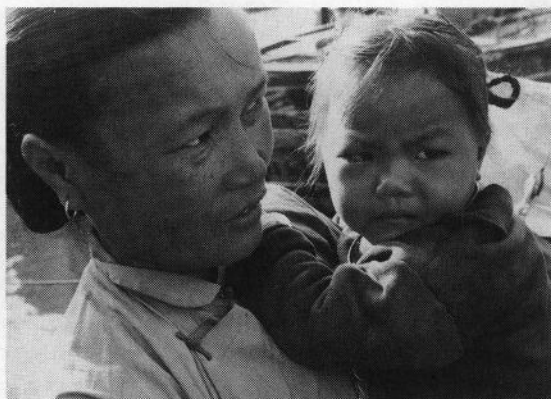


はじめに

「若人の夢ぞ尊し その夢の 現（うつつ）となりて 世は進みゆく」私がいた旧制高校のある教師の作である。半世紀も前のことで、当時の私たちは、世を進ませようとする実際の活動はもとより、世の中がどのようにして進んで行くかを研究することすら、ほとんど禁止されていた。そして「非常時」が「戦時」になってくると、人生50年どころか25年も望めないことを覚悟せざるをえなかった。したがって、前記の歌を読んでも、それはどこかのユートピアの住民のものといった印象しか覚えなかった。

その日本とも敵対関係に入る直前の1941年8月14日宣明された「大西洋憲章」の中で、英米首脳は「すべての地のすべての人間が恐怖および欠乏から解放されてその生存を全うすることを保障するような平和が確立されることを希望する」と謳って、早くも「戦後構想」の基本原則を確立しはじめていた。われわれ日本人が「戦後」を迎えるまでには、どのように経験と苦難を積み重ねばならなかったことか。「ヒロシマ、ナガサキ」、沖縄での地上戦や本土各都市の空襲、疎開、引揚げ、残留孤児……。しかし日本人は被害者であっただけではない。1931年の「満州事変」から1945年「終戦」までの「15年戦争」において、中国人2,000万に及ぶ生命の喪失をはじめアジア各地の人々に甚大な損害や犠牲を被らせた。すなわち「加害者」でもあった。

日本国憲法前文には「われらは、全世界の国民（ピープルズ）が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と記されている。前出の「大西洋憲章」に謳われた「戦後構想」の基本原則が、ここでも表明されていることは決して偶然のことではないであろう。しかし、われわれ日本人には、このような平和原理は「有史以来初めて」それが自分たちの課題になったと言わざるをえない。それが本当に自分たちのものになっていくかどうか。いや、そのようなのん気なことを言っているわけにはいかない。平和が再び、それもわれわれの足もとで脅かされているではないか。



(UNHCR)

ユネスコ憲章の言葉

「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」

ユネスコ（UNESCO 国際連合教育科学文化機関）憲章冒頭のこの文章は、敗戦直後の時期から多くの日本人が大いに共感してきたもので、それは「平和国家」の建設を志向する日本人の思想的なより所でもあった。しかしユネスコや国際連合憲章の精神について、前記の日本国憲法前文の平和原理と密接に関連させて理解した人はきわめて少なかった。

第一に、戦争と平和とを対照的にとらえる従来の国際政治学や国際知識からくる考え方の限界があったように思われる。たしかに戦争は国家と国家の間で行われる——武力を行使して自己の側の意志を押しつけ、あるいは紛争に決着をつけようとして行なわれる。そして平和とは国家間に戦争が行なわれていない状態を指すとされてきた。従って「人の心の中に平和のとりでを築く」ことも、国家間の戦争を阻止しようとする決意や、「平和」愛好や「平和」主義の精神を堅持することとして理解されてきた。

しかし実際には、ある国民が100パーセント平和愛好になることもほとんどないであろうし、ある国の指導者が100パーセント好戦的になることもあまり起らないであろう。かりに、それに「限りなく」近い状態になったとしても、それだけで国家が戦争遂行に踏切るという必要性はないであろう——。

少なくとも現在の国際社会ないし国際関係においては、むしろ可能性が大きいのは次のようなことであろう。ある国の指導層、そして国民のかかなりの部分まで、自分たちが戦争を起すつもりはないままに、軍備を保有し、増強し、戦略戦術を研究し、「有事」即応の態勢を固めていく。また同盟国との間で軍事に関する多くの面の協力を強化していく。そして、その際、防衛力が仮想敵国のそれと「均衡」していなければ「抑止」効果が薄いとといった「理論」が持ち出される。しかし、仮想敵国を持つということは、戦争がその「心の中に生れ」始めているという自覚が欠如している。

平和の意味

欧米や日本において既に20余年にわたって組織的に進められてきた平和研究の経緯や、その成果について簡単に要約することは容易ではない。しかし、その成果の一端を紹介すれば、まず、平和の意味が広く深いものになっている点が挙げられる。前記のような「国家間に戦争が行なわれていない」状態としての「平和」の概念は「消極的平和」に過ぎず、もっと積極的な平和の概念として、冒頭に引用した「恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利」が確認され確保されている状態がある。しかもそれはミニマムであって、そうした「平和的生存権」の基盤の上に、人間が持つ広く豊かな資質や能力が十分に発揮（開発）される状態が考えられる。このような状態を別の角度から説明すれば——この理論も最近の平和研究の成果の一つである——次のようなことを言う。武力など「直接的暴力」とは違うが、それと同様な機能や効果をもつものとして「構造的暴力」がある。歌舞伎などで「義理と人情のしがらみ」が人間の運命を狂わせる有様が描かれることがあるが、人情に従って行動することを許さない仕組みや関係があって人間を苦しめている。実際の人間社会においても、政治的、経済的、社会的に特殊な人間関係や体制などが複雑にからみ合って——それを「構造的」と言う——個々の人間や人間のグループを抑圧し苦難な境遇に陥れていることが少なくない。そうしたものを「構造的暴力」としてとらえるのである。

そして戦争がない状態、すなわち「直接的暴力」の最大のものである武力の行使がない状態にとどまらず、その他の暴力も、「構造的暴力」も排除されている状態を考えるならば、それが前記の「積極的

平和」の概念の内容をなす、とすることができる。

平和・人権・開発の相互関係

これも平和研究の成果の一つと言っているが、1970年代の末頃から、国連関係機関の内外において、「平和・人権・開発」という三つの概念ないし理念（あるいは領域ないし次元と言ってもよい）の相互の関係についての研究が進められてきた。既にその研究の中から、例えば「発展権」（right to development）という新しい概念が生み出され、基本的人権の不可分の一部として広く認められつつある。このような「平和・人権・開発」の相互関係の研究はさらに進められなければならないが、前記の「恐怖と欠乏から免れ平和のうちに生存する権利」や「構造的暴力」の排除ということの実質的内容を考えていこうとすれば、この相互関係ないし結合（リンクエージ、linkage）に直ちに気付くことは、むしろ当然である。さらにこの結合を念頭において、ある対象や状況を考察することが極めて有益である。

事例として、難民のことをとり上げてみよう。何と言っても、難民は個人としてもグループとしても、「平和・人権・開発」のいずれから最も疎外された人間である。そして、「平和・人権・開発」の歪みや欠落状態が、難民の大量発生の原因になっていることが多い。さらに、難民問題の恒久的解決のためには、「平和・人権・開発」のすべてにわたって適切な環境が必要である。

現在の国際社会、あるいは人類世界の多くの重要問題についても、「平和・人権・開発」の結合に留意して考察を進めることが極めて有益であると思われる。

日本国憲法前文（部分）

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

体系的な援助が必要

ザンビアに単身赴任

富田 輝司

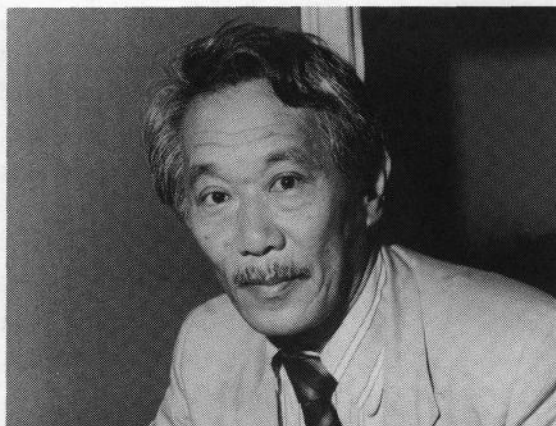
(UNHCR ザンビア勤務)

アフリカ難民の救援に関しては、危機的状況に瀕しているエチオピアやソマリアに、つい目が行ってしまうが、あのような状態になる前に手を打つことが必要だ。アフリカの半数以上の国々は最貧国でありながら、それぞれ難民を抱えているという状況であり、今のバランスが崩れればエチオピアの二の舞になる可能性は充分にある。そのような国々に対して各国の機関や国連、NGOなどが救援活動を行っている。今回インタビューした富田輝司さんはその中で働く数少ない日本人のひとりである。

富田さんは日焼けした顔にやさしい目が印象的である。大学の教壇に20年以上も立っておられたというのに教師臭くないのは、ヒューマン・エコロジー（社会生態学）という学問のせいであろうか。

*** ザンビアにはどのくらい滞在されているのですか？**
西部のカラボに9カ月です。首都のルサカに本部があるのですが、1年の内4週間ぐらいしかいませんでしたね。

*** 富田さんの仕事内容についてお聞かせ下さい。**
西部にいる難民の認定と登録が主な仕事です。ザンビア政府が居住権を与えるための調査をし、その過程でいるいる調査員を支援する。



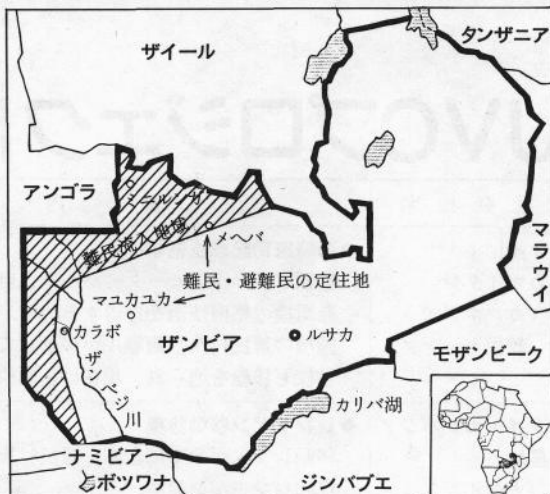
とみた てるし

ニューヨーク・コロンビア大学院卒
米各地の大学の大学院教授を歴任中、少数民族の公民権運動を指導し生活向上推進のために働く。1980年ノートルダム清心女子大学の客員教授として来日。行動心理、集団分析療法、人間関係学などを教える。

*** 受け入れ国としてのザンビアの状況はどうですか？**
農産物の生産高も低いし、種類が少ないですね。5年もの間早魃が続いているので、水が不足しています。UNHCRのプロジェクトとして、北西部のミニ

ザンビア共和国

面積 75万 2612km² 人口 603万人(1982年)
 首都 ルサカ 言語 英語(公用語)
 バントゥー系諸言語
 住民 バントゥー系諸部族が98%
 気候 5~7月冷涼乾期 8~10月暑熱乾期
 11~4月 温暖雨期
 現況 ロードシア(ジンバブエ)内戦で黒人解放勢力を支援したザンビアは、73年のロードシアの経済封鎖により大きな損害を受けたまま経済的には今だに立ち直っていない。



開発とは自分の国の中から生まれたものでなければなりません。我々はその手助けするにすぎないのです。チャリティーから脱しなければ実際の解決にはなりません。また我々が援助する場合、される側の背景、歴史とか文化を知る必要があります。その上で計画を立てなければいけません。

アフリカの子供には遊びがないのです。生存するだけで精一ぱいなので、遊びの生まれる余地がありません。遊びは社会性や創造性にとって不可欠なものですから、これも重要な問題ですね。

先ほど“教育”ということを申し上げましたが、彼らの自発性を促すための動機付のあるような教育のことです。難民の学生たちに奨学金を与えています。そのような意味だけでの教育援助ではありません。

飢餓については、これはもはや食生活が変わらなければ食糧問題は解決しないというところまできています。彼らにはほとんど野菜を食べるという習慣がありません。食事はとうもろこしが主体で、あとは肉と魚、野菜はトマトぐらいでしょうか。菜っぱなどはありませんので、日本から少しずつ種を送ってもらって、野菜の種類を増やしているところです。

*** ザンビアにはどんな援助団体が入っていますか？**
 カラボに関してですが、カナダが建設関係、食糧倉庫などを作っています。オランダは医療、農業、酪農をしています。最近日本の青年海外協力隊(JOCV)の隊員の1人が稲作指導をするようになりました。フィンランドは協同組合、ノルウェーは水供給について活動しています。あとはルーテル教会、カトリックなど教会関係が医療に携わっています。

*** NGO の活動について御意見があればお聞かせ下さい。**

まず第一の問題はそれぞれが情報交換できていないということです。いっしょに働けないし、連携や継

続もできません。たとえば水の問題にしても、オランダとノルウェーの団体がそれぞれやっているという具合です。また我々が井戸を掘っても、ポンプが壊れたらそのまま、維持できません。彼らが自分で掘っていないので、自分のものになっていないのです。彼ら自身で井戸を掘ることにより、関心を持たせることができると思います。援助は与えっぱなしではなく、彼らが発達できる援助でなければいけません。子供も急に大人になったわけではないのです。彼らの生活に不相応なものでは意味を持ちません。生活の向上も段階的でなければいけないと思います。たとえば彼らは炭を地面で直接燃やします。かまどやしちりんがあれば熱効率ももっとよくなります。また彼らの家はわら屋根の小屋ですが、床がないので不衛生です。だからといって西洋式の家をポンと持ってくるのではなく、伝統的な小屋を土台として床を作るなど少しずつ改善していく方がいいと思います。何もないので一つのをポンと援助してもだめです。物事を体系的に考えることが必要です。かまどやしちりんにはなべ、かまも加えなければいけません。

*** 最後に富田さんがなぜアフリカに行かれたのか、そのことについてお聞かせ下さい。**

私の学生時代は戦時中でしたが、戦後、浮浪児やリンペンといわれる人々といっしょに生活をしたことがあります。新宿西口やお茶ノ水あたりで子供会もしていました。今まで私の仕事相手は貧しい人々だったので、中南米、東南アジアなど、ヨーロッパを除いた世界中に行っています。私は生活改善のコンサルタント(相談員)ですから、自分を必要としている、普通の生活からはみ出た人のための力になればと思っています。アフリカは初めてですが、そのような所の一つであったわけです。

— ありがとうございます。

JVCプロジェクト

1985年3月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。 国境の難民村から新難民が移動してきたので、技術学校も移転を迫られ、現在は新築校舎を建設中。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派宗務所 花園会	トンディー・ソムカネ 永井聖子, ソムヨック・ラタナタム
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民村)	●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による、難民村及びタイ被災村の巡回レントゲン診療。 バンブー村、サイト2、サイト6にて活動開始。 ●補助給食 金曜日を除く毎日、ドライバックを供給。 栄養教育も同じく毎日実施。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区、医療部会、城西病院 西本願寺 結城青年会議所 WFP/UNBRO	金子一弘 サルミエント・ロドリゴ クリアンクライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン 武田長久、浜野敏子 トンチャイ・クラタルムボン 古西 勇 プレムチット・スリホン、 カヌエンニット・ソーンマユラ マーシャ・イシイ
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育及びオリエンテーション。生徒数、カンボジア人31名。	天理教千葉	鈴木絵理子 浜崎妙子、落合正幸
タイ農村	●給水 スリン県12カ村での共同井戸掘りと基礎的健康教育。 被災村での給水活動が年度内で終わることもあり、ブリラム県の拠点になりうる農村を調査中。	モラロジーMIRC NTV	ブンナム・チャルンプリトゥム カモン・ミンムアン
バンコク市内の スラム	●スラム改善 奨学金援助：スラム児童のための学費援助 図書館：児童、成人のための図書館 建材提供：スラム立ち退き者への物資援助。 6区の図書館の解体と移動が行なわれてからは、現在12区の倉庫を借りて、臨時の図書室としている。	モラロジーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA 横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	タウィチャイ・タムクナノン ヴァラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也 ウィティパン・ラタナタリー
バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計総務、情報収集および広報、バザー等。 季刊「ニューズ・レター」(英語・タイ語)発行 バンコクでの活動者会議及び本部での会議により、新しいバンコク事務所長を選任した。	全国社会福祉協議会	佐藤正喜(バンコク事務所長)、本橋 栄、 ボンビモン・チャイブーン 勝俣江美、 ティアン・パントゥー、 他約10人
エチオピア ウォロ州	●緊急医療事業 2月、ウォロ州アジパールの医療センター開設。 外来、入院患者の受け付けが始まる。続いて治療のための給食も始まる。 現在入院患者80人。現地のスタッフは臨時を含め80人。JVCの医療センターが開設されてから被災民が大量に流れ込み、12月に約500人だったのが現在は約2万人になり、なお増加中。受け入れ態勢の強化が行われている。	朝日新聞厚生文化事業団 働B・R・B ノートルダム修道院	林 達夫、石井清美 荻野美智子、工藤美美子 福村州馬 現地スタッフ約80人

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア (マガネイ・キャンプ) (アフリカ)	●職業による自立促進 エチオピアからソマリアに逃れてきた難民を対象にした農業による自立促進プロジェクト。 乾季の終わりを告げる雨が3月12日に降った。川底が見えかけていたジュバ川の水位も上り、種蒔と用水路修復に忙しい毎日である。主食のトウモロコシの他、用水路沿いに防風、防砂、小路補強を目的として、砂糖キビ、パパイヤ、バナナ、レモン等の多年性作物を植えた。 昨年の暮れから今年の2月にかけて、ディーゼル不足により揚水が止まったが今は解消し、再び緑が広がりつつある。今年も難民やソマリア政府の要望にこたえ、農場を更に50ha 拡大させる。 一方新難民の救援活動は、新難民の一時滞在地に関するソマリア政府の明確な決定と実施が遅々として進まないため、従来通り JVC 居住地内の活動に留まっている。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土の会 創価学会 ジャパン・タイムズ 九段ライオンズクラブ	税田芳三(ソマリア事務所長)、高橋一馬、掛村 均、山口誠史、米澤 聡、柿原建三、モハメッド・アデン・モハメッド、シャッド・モハメッド・ムザール、ラジッド・モハメッド・ランジャイル、サディック・モハメッド・アリ、モハメッド・ハジヌール 現地スタッフ25人 嶋 紀晶、樫田秀樹、高宮有介
モザンビーク (アフリカ)	●フード・フォ・ワーク活動への人材派遣と調査 2月11日の執行委員会でモザンビークにおけるプロジェクト中止を決定。		
日本国内	●日本語家庭教師 東京、埼玉、神奈川、千葉、山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。昨年10月より神奈川県大和市に開校した日本語教室は第Ⅱ期を3月末で終え、現在第Ⅲ期に向けて準備中。インドシナ難民以外も含め対象難民の数は216人。	禅林寺 UNHCR 中部善意銀行	森山久寿子 他約70人
	・バザー、ハンディクラフト販売		関 田鶴子 他約20人
	・カオダイン「国境を越えた人々」上映運動	浄土真宗本願寺派 高岡寺族青年会	鴫田三芳
東京事務所 (本部)	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行 JVC 説明会～毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢、鴫田三芳 佐々木志保、下園宏司 内山田 康、前川昌代 高塚政生 他15人
人材派遣プロジェクト			
シンガポール (ホーキンスロード・キャンプ)	・UNHCR -ベトナム難民キャンプでの管理・運営	日本YMCA同盟 アジアキリスト教会議	ニール・リー

☆個人の方からの寄付につきましては、月ごとに集計を出し、裏表紙に掲載しております。個々の方のお名前は半年ごとに一括してご報告いたしております。

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救済団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救済活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- インドシナ難民救済募金 (3月小計 7,360円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - クロントイ・スラム募金 (3月小計 3,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
 - デッグ・スラム奨学金 (3月小計 103,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - アフリカ難民救済募金 (3月小計 318,899円) アフリカの難民・飢餓民への救済プロジェクトに使われます。
 - 日本語家庭教師募金 (3月小計 100,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - 医療募金 (3月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救済物資を輸送するために使われます。
 - ボランティア募金 (3月小計 2,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
 - JVC運営経費募金 (3月小計 85,691円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - 無指定募金 (3月小計 384,996円)
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶東京では桜も葉桜になり、一年で一番いい季節を迎えようとしています。そんな中、アフリカでの活動も軌道に乗ってボランティアの出入りが活発になっています。「ゴールデン・ウィークは現地でも休めますか」などと本気で心配するボランティアもいますが、長期滞在になりますのでそれぐらいの心の余裕があれば体力も気力も長持ちするでしょう。ボランティアに要求されるのは、ほどほどの情熱としつこさと、少々事には堂びない図太さと、できれば繊細な神経も持ち合わせていればなお可です。

▶4月21日のオリエンテーションには20名以上の参加者があり、狭いオフィスからはみ出してしまふほどの盛況でした。春うららかな日曜日の午後、ほかの約束はふり切ってオリエンテーションに参加したことがボランティアの第一歩だと思います。

▶桶川北小学校の小峰先生がとり上げたアフリカの総合学習はとても素晴らしいと思います。今まではアフリカの惨状に対しても募金だけのかかわり方で終わってしまいました。子供たちにとってアフリカが身近になったに違いありません。飯村君の「募金でも手助けができたでしょうか」ということが胸に残ります。(前)

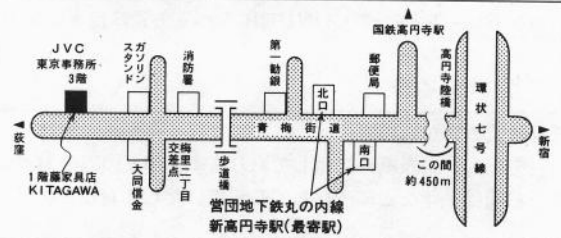
昭和60年3月20日発行(毎月20日発行)

編集人 下園 宏司 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F
 ☎03(316)3253 Telex: 2323187 JVCHQ

バンコク事務所 JVC THAILAND
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, THAILAND ☎(286) 4857
 ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadish, SOMALIA
 Telex: 794 HICOMREF SM

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。



定価 送料共 300円